

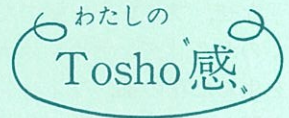
図書館だより

1986.10.22

第8巻3号

通巻99号

Bulletin of the Hokkai Gakuen University Library



図書館の魅力

法学部教授
山本佐門

私は「図書館愛好家」を自認している。それは職業柄とか、「本の虫」の類ではなく、もっと内発的で、広く、気楽なものだと思う。図書館が私を引き付けるのは単に蔵書の魅力だけではなく、館全体で生み出す効果、雰囲気というべきものである。それらの魅力は多分に私の歩みの中で図書館を通じて得た貴重で、忘れ難い経験の結果によるものであろう。この中でも特に心に刻み込まれた経験が三つある。

その一つは、大学・大学院受験期の区立図書館、大学図書館自由閲覧室での充実感をともなった体験である。いずれの場合も相手手遅れ、あせり気味の状態で、にわか勉強をしいられ、閲覧室に通う毎日となったのだが。この空間、さほど広くもなく、もちろん個室などなく、人の出入り、私語も多かった。しかし利用時間以外の規制のないこの部屋ですごす一日の何時間が私は驚くほどの集中力と気持の安定を得ることができた。受験準備期の私にとって最良の場はこれら図書館の自由閲覧室であったかもしれない。

第二の体験は、西ドイツ滞在期での小さな居住区図書館のそれである。暇ができた時ドイツ人との付き合いに疲れた時、いつもそこを訪れた。そこは小学校舎の一部であり、学校の図書室兼住民向け図書館であった。それゆえ多くの子供向け図書とともに、人気小説、趣味の本など住民が日常的に関心を持つ様々な領域の書物が開架の形で収められていた。訪れる親子連れ、老人達、そして彼等と図書館職員との親しげなやりとり、それらをながめながら日刊紙を読んだり、各地の旅行ガイドや統計書に目を通したりしていた。そこは私にとって書物を通じ具体的にドイツを知る

場となったとともに、疲れをいやし、気持を豊かにしてくれた場でもあった。このドイツの住区図書館から私が得たものは、文書館めぐりでの専門資料収集の成果に劣らない。

第三の体験は今も続く書庫めぐりである。教員として当然であろうが、私も週に、時には日に何回も附属図書館の書庫に入る。目的は必要な書物の借り出しである。しかしこの目的ですぐに書庫から出てくるのは稀である。その書の周辺、その途中で興味ある別の出版物を目にし、取り出しながめてくる。その都度興味の対象が異なるから、立読みする書には当分不足しそうにない。これが入庫機会の少ない他大学・研究所の図書館ではなおさら。書庫で立読み時間が長くなり、心配して捜しにきた職員に「閲覧は別室で」と注意されたことも再々である。

自由閲覧室よし、開架図書よし、書庫よし。こんな体験につき動かされてか、訪れる町々、図書館(室)らしきものを目にすれば入りこみ、開架図書そして利用者、職員をながめ、館の雰囲気を感じとってくるのも習慣となっている。

利用者の好奇心をそそりかつ落ち着いた雰囲気があるという図書館の魅力は、館の機能性と蔵書水準の向上によってのみもたらされるものではない。図書館の職員、利用者の努力、相互交流の中で不断に形成されてゆくものもあろう。

我大学の新図書館のオープンも間近い。ここでどのような魅力が形成されてゆくのか、楽しみでもあり、心配でもある。

(やまもと・さもん 政治学)

しおのななみ
塩野七生の本

—イタリアを日本の隣に引き寄せる女性—

なぜ、フィレンツェでなく、ヴェネツィアを書くのか？ ダンテやレオナルドやミケランジェロを生んだ花の都、フィレンツェ共和国ではなく—と問われ、著者は答える。“ルネサンス文明の裏の方を書くのだ。国体を変えないでいて、あれ程長続きした国は他にないから”と。副題にヴェネツィア共和国の一千年とある。

「海の都の物語」

中央公論社 1980—1981 正統2冊

西暦452年にフン族のアッティラに追われて、葦の生えているだけだった沼地（潟^{ラグーナ}）に移り住んだ人々がいる。島と島の間、干潟と干潟の間の水の流れている部分を、その最も深いところだけ残し、兩岸を木の杭や石材で固めて、運河を作る。2本の川から流れ込む水と、海水がぶつかって洪水にならぬよう、櫛の歯のようにたくさんの水路をつくる。伝染病を発生させぬため、海水はつねに流れていなければならない。こうして、生きている潟^{ラグーナ}づくりで成功したヴェネツィア人は、828年聖マルコの遺体を買って持ち帰り、ヴェネツィアの正統な主護聖人と決め、これをきっかけに現在の場所であるリアルトへ、最後の国ぐるみの移住を

する。そこには潟^{ラグーナ}の中央に位置し、陸地からは最も遠く離れていた。

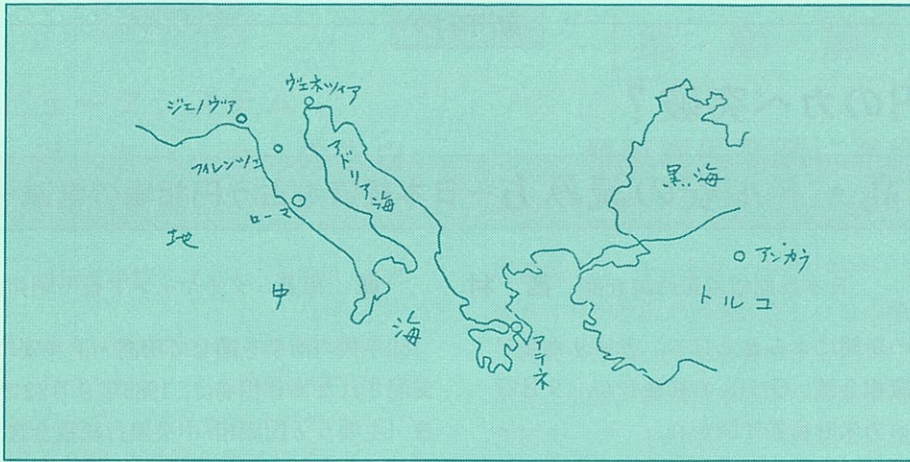
そして海へ！ 骨の髄まで商人で、中世の“エコノミック・アニマル”であった彼らは、12世紀には、自給自足という概念のまったくない海洋都市国家へと成長していく。シェイクスピアが「ヴェニス^の商人」（1596—97）を書く程有名になったヴェネツィア商人は、250年間にわたる宿敵トルコとの対決も、場あたり主義でなんとか切り抜け、コロンブス（ジェノヴァ人、スポンサーはスペイン）、ヴァスコ・ダ・ガマ（ポルトガル）が活躍した大航海時代を乗り切り、有能な君主に恵まれ、効率の良い政体で急速に発展するハプスブルク王朝や、フランス、イギリス等の大君主国に対抗して、共和制を保持していく。

18世紀末の1797年、ナポレオンに占領されるまでの歴史は、西洋の他の国に比べて、私たちに共感できる部分が多い。まず魔女裁判が一件も起っていないこと。カトリック教の国でありながら、ローマ法王庁からは自由であり、中世ヨーロッパを巻きこんだ法王派と皇帝派の争いにも巻き込まれず、しかも得るべきものは得ていた。宗教がちがおうと、他国の人々との交易で生きてきたヴェネツィアは、他者の存在を認めることの必要性を肌身にしみて知っており、宗教の自由、言論の自由、政教分離の伝統があった。（日本の政教分離は鎌倉幕府からである）。アンティ・ヒーローの国に徹し、国の基本外交方針を絶対中立に置き、商才

新着図書(選) — 教養

知的生産の技術 久恒啓一著 TBSブリタニカ/実務の処女地を開拓する 川喜田研究所著 プレジデント社/国際・学際^に挑む 川喜田研究所著 プレジデント社/返品のない月曜日 井狩春男著 筑摩書房/学問への旅 森本哲郎著 佼成出版社/ミニコミ戦後史 丸山尚著 三一書房/表と裏 土居健郎著 弘文堂/ダグラス・マッカーサー 上, 下 W.マンチェスター著 河出書房新社/ゴルバチョフ 西村文夫著 日本経済新聞社/河童が覗いたインド 妹尾河童著 新潮社/ブルー・ハイウェイ 上, 下 W.L.H.ムーン著 TBSブリタニカ/深い泉の国日本 T.インモース著 春秋社/五年後の日本 —こう変わるあなたの身のまわり ホームビジネス編— 講談社編/にんげん研究ニッポン人 J.ヨルパルト著 新潮社/目で

見る日米比較 一経済・政治・社会・文化・教育・自然— 武田勝彦 安原明夫編著 講談社/香港と中国—一つの国家二つの制度— 小林進著 アジア経済研究所/現代イスラム事情 高井清仁編 講談社/神話花の都バリの崩壊 山中啓子著 講談社/アメリカン・ビート B.グリーン著 河出書房新社/アメリカのニューエリートたち ハロラン英美子著 文芸春秋/オリーブの森で語りあう M.エンデ 岩波/死語の戯れ 松本健一著 筑摩書房/二十世紀を歩く 森本哲郎著 新潮社/事実を見る眼 柳田邦男著 新潮社/カリフォルニア・リポート 猿谷要 我妻洋編 有斐閣/日本文化のかくれた形 加藤周一編 岩波/行動する国際人たち 梅棹忠夫著 講談社/アメリカ人のソ連観 下村満子著 朝日新聞社/核の冬 C.セーガン著 光文社/小さな民からの発想 村井吉敬著 時事通信社/成長する都市衰退する都市 佐貫利



とその組織的運営で、一国を現代の私企業の会社と同じように経営した。ライバルのジェノヴァ共和国が個人主義で、船乗りとしても商人としても天才的なのに比べ、ヴェネツィアの経済をささえたのは、安全成長をモットーとする堅実な会社の経営者をおもわせる男たちであった。断然優れていたのは組織づくりで、結局これが最後にもものを言うことになる。新製品開発では遅れをとっても、その企業化では、抜群の能力を誇っていたのがヴェネツィアなのである、と。このヴェネツィアを日本と置き換えてもおかしくない程現在の日本に似ているが、羨ましいのは、外交の巧みさであろうか。

もし、塩野七生の一冊をあげよと言われたら、「ルネサンスの女たち」中央公論社 1969 処女作はその作家の全てを含むと言われるし、なじみの

ない1450年から1550年までのイタリアの一世紀が、さまざまな女たちの姿となって血を通わせ始めるから。なんとって短いので読みやすいのです。毎日出版文化賞を受けた2冊目の著書、「チェーザレ・ボルジアあるいは優雅なる冷酷」新潮社 1970 もローマ法王庁を書いた、「神の代理人」中央公論社 1972 も同じ時代を舞台にしています。

「イタリアからの手紙」新潮社 1972、「イタリアだより」文藝春秋 1975 はエッセイなので歴史はにが手と言う人にどうぞ。

「海の都の物語」の余波として書かれた作品に、「イタリア遺聞」新潮社 1982、「サロメの乳母の話」中央公論社 1983、「コンスタンティノーブルの陥落」新潮社 1983、「ロードス島攻防記」新潮社 1985 等があります。歴史を最高の娯楽と考える人にお薦めします。(K)

雄著 時事通信社/日本人と国際コミュニケーション
 梶山皓著 産業能率大学/地方文化人と東京文化人
 玉井政雄著 あらき書店/対談教えることと学ぶこと
 林竹二 灰谷健次郎著/臨教審のすべて 季刊教育法
 編集部編 エイデル研究所/人間のルネサンス 川
 喜田研究所著 プレジデント社/変革期の大学像 天
 野郁夫著 日本リクルートセンター出版部/大学評価
 の研究 慶伊富長著 東大出版部/留学案内 小川尚
 子著 講談社/ゲーデル、エッシャー、バッハ D.R.
 ホフスタッター著 白揚社/文科系の数学 渡部昇一
 深見哲造著 新編 森北出版/エントロピーとは何だ
 ろうか 小出昭一郎 安孫子誠也著 岩波/神を演ず
 る J.グットフィールド著 岩波/バングラデシュに
 生きて 宮崎亮 宮崎安子著 新教出版/日本人の脳
 角田忠信著 大修館/病院倒産 保阪正康著 朝日ソ
 ノラマ/現代人のメンタルヘルス 一野ら犬のごとく

生き、獅子のごとく育てー 松村紀高著 産業能率大
 学出版部/電子戦争 一恐るべき未来戦の実態ー P.
 ディクソン著 時事通信社/食糧 一何が起きている
 かー 朝日新聞経済部編 朝日新聞社/国鉄を再建す
 る方法はこれしかない 三塚博著 政府広報センタ
 ー/テレコミ社会の誕生 ーNTTが生みだすものー
 田村紀雄著 サイマル出版部/ビートルズ ラブ・ユ
 ー・メイク 上, 下 P.ブラウン S.ケインズ著 早
 川書房/フェリーニ, 映画を語る F.フェリーニ著
 筑摩書房/蝦蟇の油 黒沢明著 岩波/さらば麗しき
 ウィンブルドン 深田祐介著 文芸春秋/野球のトレ
 ーニング 平野裕一著 大修館/「する」と「なる」
 の言語学 池上嘉彦著 大修館/これでいいのか日本
 人の語学感覚 J.ファンク著 自由国民社/武器とし
 てのことば 鈴木孝夫著 新潮社/外から見た日本
 語, 内から見た日本語 国語学会編 武蔵野書院

150円のカベ突破？

円高・ドル安の読み方—日本経済を占う円相場の常識—

日本長期信用銀行調査部 西村 厚 編著 ダイヤモンド社 昭和61年

9月28日の新聞によると「日本、アメリカなど先進7ヵ国蔵相会議（G7）の初会合が、9月27日ワシントンの米財務省で開かれ、

- ①日本、西ドイツなど黒字国は一層の内需拡大を図るべきだ。
- ②赤字国アメリカは対外赤字と財政赤字の削減に努める。
- ③これらの行動は、為替相場の一層の調整なしに不均衡を是正するため必要—

などを再確認する共同声明を採択した。

会合では、日本、西ドイツに対し金利引き下げを含む一層の内需拡大を求めるアメリカと、ドル安・円高、マルク高による輸出低迷、デフレ効果や財政難にもかかわらず精一杯、景気刺激策を実施しているとする日本、西ドイツの間で激しい議論となったが、結局、日本にとっては一層の内需拡大を求められることになった。」と報じた。

1986年の日本経済は、為替相場での予想外の円高に激しくゆすぶられている。

80年代の前半を通じて円高・ドル安のすう勢に支配された為替相場は、1985年9月22日のG5会議（主要5ヵ国蔵相・中央銀行総裁会議）を境に、一転して円高に転じた。それをきっかけに、ドル・レートは低落し、1ドル240円だったのが、85年末には200円、86年2月には170円、9月末現在で154円まできた。150円割れも時間の問題と思われる。9月27日のG7の共同声明により、日本は一層の内需拡大と市場開放、貿易黒字の解消、日本経済の構造調整等、多くの課題をかかえたことになる。本書は、今後の日本経済を占う円相場の常識——なぜ、どのようにして円高は起ったか、円高によって日本の経済・産業はどう変わるか、円高・ドル安はどこまで進むか、円・ドル相場予測の実際（86年末・87年末）——について書かれた最新（昭和61年9月刊）の書で円高・ドル安についての知識がなくてもだれにでも理解できるように易しく書かれた良書である。（S）

新着図書(選)—経済

目で見る日米比較 武田勝彦 安原明夫編著 講談社/日米間の紳士録 井上協著 新日本出版社/経済学は現実にこたえうるか 伊東光晴著 岩波書店/情報エコノミーの衝撃 斎藤精一郎著 日本経済新聞社/見えてきた21世紀 山本雄二郎著 中央経済社/経済の英語 寺沢浩二著 研究社/経済における合理性と非合理性 M.ゴトリエ著 国文社/日本資本主義論争の群像 長岡新吉著 ミネルヴァ/八面六臂のガルブレイス ナガイケイ著 富士書房/サービス労働論 渡辺雅男著 三嶺書房/現代日本経済論 蝦名賢造 森本正夫編 新評論/流通地域論 長谷川典夫著 大明堂/公共政策 野口悠紀雄著 岩波/大統領の経済学 —ルーズベルトからレーガンまで— H.スタイン著 日本経済新聞社/世界の一割国家日本と

国際環境 経済発展協会編 第一法規/国際開発協力の仕組みと法 桜井雅夫著 三省堂/日本的経営と「合理化」 松本正徳著 中央大学出版部/日本的経営と欧米的経営 山田保著 中央経済社/日本経済と六大企業集団 角谷登志雄著 新評論/海外進出企業の実態 坂本康實著 東洋経済新報社/中堅企業の海外進出 —6社の成功例にみる— 吉原英樹著 東洋経済新報社/多国籍企業と内部化理論 A.M.ラグマン著 ミネルヴァ/多国籍企業と労働問題 佐々木建著 京都ミネルヴァ/これがニュービジネス —すごい53社— 毎日新聞社経済部編 毎日新聞社/日本大企業の所有構造 三戸浩著 文眞堂/設備投資と日本経済 国則守生 高橋伸彰著 東洋経済新報社/企業改革の時代 大島国雄著 同文館/経営者報酬制度の発達と構造 菅野康雄著 千倉書房/事務システムへのアプローチ 村越郭人著 学文社/戦略的経営

コンピュータシステム 侵入者ハッカーの告白

ネットワーク犯罪入門 ビル, ランドレス

椋田直子訳 アスキー出版局 1985

昭和60年4月1日の通信の自由化を契機に、わが国でも多くのコンピュータを通信回線で結ぶ総合通信ネットワーク、VANが動き始めた。

この通信の自由化、VANの普及によって、これまで孤立した存在であったパソコンが通信機能を持つようになり、誰でも勝手に電話回線を通じてVANやそれにつながる大型データベースにアクセスできるようになった。この本は、米国の大規模VAN業者であるGTEテレネット社の電子メールサービス専門のコンピュータを不正に使用した疑いでFBIに逮捕されたビル、ランドレスという16歳の少年が、ハッカー（コンピュータシステム侵入者）たちをシステム破りに駆り立てる動機やその手口、テクニックまでを告白した手記であり、まるで、映画「ウォーゲーム」を地で行ったかのようなものである。通産省などでは、既に情報化社会に対応したコンピュータ・セキュリティに関する法律の制定を検討している。この本は、ハッカー側からのコンピュータ・セキュリティに関するアドバイスであり、今までに類を見ない画期的な本ということができる。(S)

移転準備順調に進行

雪虫が飛びかい、冬の訪れを感じさせるこの頃、図書館では、今、来春4月の新館オープンにむけ、来春3月の移転の準備に忙しいこの頃です。

移転の準備は、全蔵書のチェック、開架図書を選定、装訂、新館書庫書架への配架割付けなど、新館オープンを目指して、地道な作業が続けられています。新館の施設は、利用者が快適に利用できるように利用者の立場に立っていろいろな検討を重ねました。新館の施設の中からいくつか拾って紹介してみましよう。

新館の施設には、まず、快適な閲覧席(F2:163席、F3:224席 自由閲覧席 F1:78席 計465席)が各階に配置されています。F3にはAV(視聴覚)室があり、各種装置で見る聞く学習ができます。また、グループ学習室(F3)では、図書館の資料を使いながらグループ学習をすることができます。雑誌ブラウジングコーナー(2F)では、新着の雑誌を専用のソファでゆっくり読むことができる等々であります。

詳しくは、次号でお知らせします。(S)

とコントロール・システム W.H.ニューマン著 マネジメント社/ニューメディア時代の経営戦略 日本能率協会編/ZDの新展開 一先進六社の自主管理活動の実際 日本能率協会編/競争戦略開発法 W.E.ロスチャイルド著 ダイアモンド社/花王のパソコン社内革命 花王石鹼システム開発部著 中経出版/オフィス情報システム論考 加藤録吉著 晃洋書房/立石電気のパソコン活用戦略 日本能率協会編/オカムラのOA戦略 岡村製作所経営総合システム研究所著 ダイアモンド社/オフィス・ロボット時代和多田作一郎著 工業調査会/トップマネジメントと経営組織 K.J. Albert 著 日本生産性本部/企業文化の創造 梅沢正著 有斐閣/経営組織実証研究 矢野俊介著 白桃書房/経営組織と人間行動 矢野俊介著 白桃書房/OAによる人事情報システム 古小路四朗著 日本生産性本部/松下電器の人材活用システ

ム 小池亮一著 プレジデント社/労務戦略の展開 三浦武盈著 森山書店/能力開発事例集 産業労働調査所編/日本の人事労務管理 吉川栄一著 有斐閣/東京マネー・マーケット 森田達郎 原信編 新版有斐閣/銀行論 矢島保男編著 成文堂/日本の銀行業・証券業 辰巳憲一著 東洋経済新報社/財政赤字の経済学 吉田和男著 東洋経済新報社/ポスト・サービス社会 一崩壊する高度技術社会の神話 B.ジョーンズ著 時事通信社/FAが工場をどう変えるか 通商産業省産業政策局企業行動課編 日本能率協会/日本型企业福祉 社会経済国民会議編 三嶺書房/企業年金の導入と運用 五島淺男著 中央経済社/退職金・年金総合検討資料 産業労働調査所編/日本の情報機関(シークレットサービス) 一経済大国・日本の秘密 R.ディーコン著 時事通信社/日米技術戦争 牧野昇 志村幸雄著 日本経済新聞社

「私の諸著作品について」

今村 成和

1950年に研究者の道を歩むようになってから、もう40年近くなる。この間に十数冊の書物を出す機会を持ったが、それにはどのようなものがあるかを次に記してみよう。私の専門は法学の中でも行政法と経済法（独占禁止法）という二つの分野にまたがっている。私の初期の著作の中では、「国家補償法」（1957）と「独占禁止法」（1961）（共に、有斐閣刊の法律学全集）が、それぞれの分野に属する書きおろしの体系書で、いずれも、この種のものとしてはわが国では最初の著述である。後者については、1978年に新版を出した。

前者についてもその計画はあるが、実現のめどは立っていない。その他の著書の多くは論文集で、行政法に関しては、「損失補償制度の研究」（1968）、「現代の行政と行政法の理論」（1972）、「人権と裁判」（1973）、「人権叢説」（1980）がある。また独占禁止法に関しては、「私的独占禁止法の研究」（1）を1956年に刊行して以来、1985年の（5）に至るまで計6冊（（4）は2冊）を出した。

このほか、私は「行政法入門」（初版1966、3版1986）と「独占禁止法入門」（1983）を教科書とし

て書いているのでこれについて説明して置こう。「行政法入門」では、私は現行憲法にふさわしい、新しい行政法学の展開を志した。これを一言でいえば、「行政法とは行政府の活動に対する民主的統制を目的とするもの」との認識のもとに、権力の侍女たるに過ぎなかった伝統的な行政法学からの脱皮をはかったもので、上記行政法関係の著書や諸論文は総てその為の素材となるものであった。これに対し「独占禁止法入門」は、戦後新しく取入れられたこの制度についての永年の研究の要約に外ならないもので、その跡を示すものとして同法関係の上記諸作品が存するのである。

（プロフィール）

今村 成和 IMAMURA, Shigekazu

（1913. 7. 20生） 宮城県出身。

昭和50—56年 北大学長、北大名誉教授、法学博士。

昭和56年— 本学法学部教授。

研究分野 国家補償法／基本的人権／独占禁止法。

新着図書(選) — 法律

犯罪報道の犯罪 浅野健一著 学陽書房／戦争責任家永三郎著 岩波／北海道町村制度の研究 鈴木英一著 北大出版会／張謇と辛亥革命 藤岡喜久男著 北大図書刊行会／政治理論のパラダイム転換 藤原保信著 岩波／現代政治学の基礎 S.M. リブセット編 東大出版会／政治学 横越英一著 改訂版 日本評論社／政治学史 福田歓一著 東大出版会／石橋政権・七十一日 石田博英著 行政問題研究所／岸政権・一二四一日 大日向一郎著 行政問題研究所／イギリスの民主政治 R. ミリバンド著 青木書店／大粛清・スターリン神話 I. ドイッチャー著 TBSブリタニカ／国家と宗教の分離 アーアメリカにおける政教分離の法理の形成一 瀧沢信彦著 早稲田大学出版部／情報公開と知る権利 清水英夫編 三省堂／通産省の挑

戦 村上薫著 東洋経済新報社／官僚制と犯罪 山中一郎著 学文社／日本警察の生態学 W.L. エイムズ著 勁草書房／警官汚職 読売新聞大阪社会部編 角川／犯罪のない街づくり 都市防犯研究会著 東洋経済新報社／自治体法と法学の基本原則 東條武治著 啓文社／現代都市の行政と政治 水口憲人著 法律文化社／国際関係論のフロンティア 1～4 東大出版会／人権と司法 外尾健一〔ほか〕編著 勁草書房／法律英語の事典 長谷川俊明著 東京布井出版／法学入門 平場安治著 青林書院／判例による法学入門 中川善之助著 青林書院／社会のレトリック 土屋恵一郎著 新曜社／自由と規範 上原行雄 長尾龍一編 東大出版会／法学概論 善家幸敏著 第2版 成文堂／国民権の史的展開 杉原泰雄著 岩波／憲法論攷 竹内重年著 啓文社／日本人の憲法感覚 奥平康弘著 筑摩書房／行政法総論 藤井俊夫著 成文堂／

卒論・ゼミ論の書き方 その1

—論文ノートと情報カードによる情報整理学—

大学に学んだ者が、4年間の学習の成果の総括を、自らに課するものが卒論あるいはゼミ論であると言えます。卒業論文、ゼミ論には、まず、テーマの設定が必要です。「論文はテーマが決まれば半分でき上がったようなものである。」とよくいわれますが、論文のテーマを設定するのに一番大切なことは、自分の創意による、自分だけが見出した論点をもとにすることです。テーマを見つけるには、自分の興味の対象を明確にし、その対象のもつ問題点を探ることです。

つまり、その対象について書かれた事典や概説書、文献目録、出版目録、古書目録、図書館の蔵書カード目録等を図書館で調べて、自分の選んだ対象に関する通説を整理してみることで、通説と、自分が漠然と描いていたイメージとの食い違いを発見できたら、それは重要な論点であり、テーマとなるものです。どうしてそういう食い違いが生ずるかを追求していけばよいのであって、通説が拠り所としている資料を吟味すると同時に、自分のイメージを裏付けるような資料を集めていけばよいのです。つぎに、資料を収集し、整理する上で役立つ情報整理法を紹介しますので参考にしてください。

〈論文ノートの利用〉

- 論文のテーマに関係あると思われる本や論文にふれたら、その文献名を書き留める。
- 新聞・雑誌にテーマに関係のある論稿や談話があったら、切り抜いて貼っておく。
- 突然のひらめき、疑問点を書き留めておく。
- 資料に当る順等、研究のスケジュールを記しておく。

〈情報カードの利用〉

情報カードはいろいろな種類のものが市販されている（生協にも各種あり）が、使い易い大ききで、横線だけを印刷した、単純なものがよい。カードにはボールペンかペンで、書名、著者名、ページ数、発行所、発行年次を記入する。記入の方法については、図書館の蔵書カード目録を参考にしてください。つぎに、その余白にその本の要約文あるいは自分がその文献を必要とする理由等を記入しておく、後の利用のときとても便利です。（S）

参考文献：早大出版部編 卒論・ゼミ論の書き方 昭59 $\left[\begin{smallmatrix} 8 & 1 & 6 \\ W & 4 & 1 \end{smallmatrix} \right]$

白佐 俊憲 学生・初学者のための原稿用紙に書く方法 富士プリント 昭60 $\left[\begin{smallmatrix} 8 & 1 & 6 \\ sh & 8 & 5 \end{smallmatrix} \right]$

梅棹 忠夫 知的生産の技術(岩波新書)昭47

行政法を学ぶ 1, 2 室井力 塩野宏編 有斐閣／行政法入門 今村成和著 新版 有斐閣／ワークブック行政法 市原昌三郎編 有斐閣／現代憲法講座上, 下 横田耕一著 日本評論社／民法学事始 石田喜久夫著 成文堂／財産法入門 小川賢一著 中央経済社／担保物権法 我妻栄著 新訂 岩波／愛と家庭と 前田達明著 成文堂／不動産の法務と税務 栄木忠常 北條恒一編 銀行研修社／家族と法 田中実〔ほか〕著 慶應通信／家族生活と法 米倉明編 有斐閣／相続・贈与の法務と税務 栄木忠常 北條恒一編 7訂版 銀行研修社／新不動産登記読本 浦野雄幸著 新訂6版 商事法務研究会／中小企業の法務と税務 栄木忠常 北條恒一編 7訂版 銀行研修社／会社法 鈴木竹雄著 (全訂第2版) 補正版 弘文堂／会社法詳論 上, 下 田中誠二著 再全訂版 勁草書房／会社法演習 1, 2 上柳克郎 鴻常夫 竹内昭夫編

有斐閣／海商法詳論 田中誠二著 増補3版 勁草書房／医療行為と刑法 米田泰邦著 一粒社／刑法要説各論 岡野光雄著 成文堂／刑法各論 高窪真人〔ほか〕著 青林書院／刑法各論講義 瀧川春雄 竹内正著 有斐閣／田中角栄は無罪である 井上正治著 講談社／人権と裁判 今村成和著 北大図書刊行会／家庭裁判所制度抄論 野田愛子著 西神田編集室／控えめな裁判所 A.S. ゴールドシュテイン著 中央大学出版部／独占禁止法入門 今村成和著 有斐閣／教材独占禁止法 実方謙二〔ほか〕著 第2版 青林書院／国際法 山本草二著 有斐閣／新海洋法概説 高梨正夫著 成山堂／東京裁判から戦後責任の思想へ 大沼保昭著 有信堂／国際私法 石黒一憲著 有斐閣／カナダ移民排斥史 新保満著 未来社／現代の企業—ゲームの理論からみた法と経済— 青木昌彦著 岩波

氷河が贈った 至福と清浄と瞑想の峰

マッターホルン

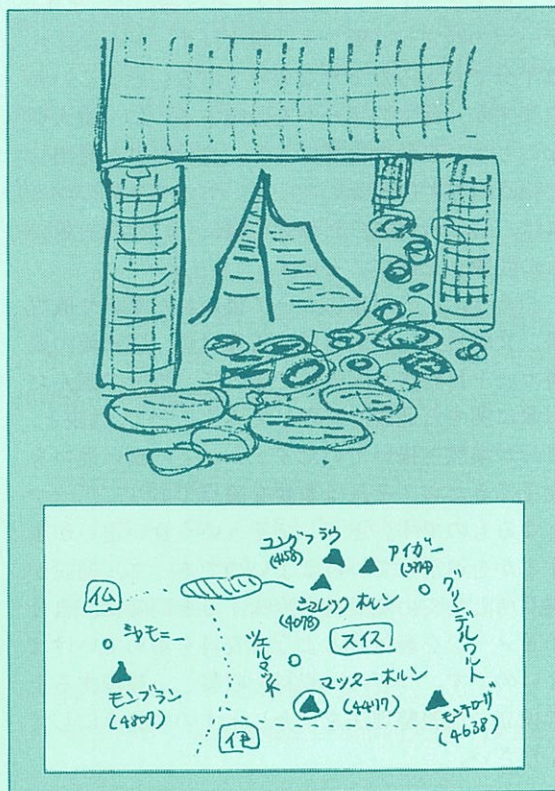
(最終回)

アルプスには「悪魔」がすむと言われて来た。今から200年前、1786年に初めて「モンブラン」が征服されるまでは。それから79年後1865年に、イギリス人、ウィンパーが5年をかけてマッターホルンを登りつめたとき、アルプスは人々のものとなった。マッターホルンにはモーツアルトの音楽のように造形的な美がある。氷河が贈った傑作であろう。ふもとの湖に映るマッターホルンはさぞ美しいに違いない。谷からはヨーデルが流れ、名花エーデルワイスが咲く夏が終わるとアルプスはもう冬。白い世界こそ「至福と清浄と瞑想」の境地とみる。いくつかの写真集があるが、今年出た『the Alps』(藤田弘基)は迫力あるアルプス紀行となっている。夏の夜明け、朝、昼、夕と刻々変わる姿をとらえている。「マッターホルンの365日」をいつか出版して欲しいものだ。

<メモ>

マッターホルンはツェルマットを中心とした「パリス山群」に入る。4477mでアルプス中第5位。最高峰はモンブランで、今年(2000年)は登頂200年目に当る。ピッケルやハーケンが作られたのもその頃。スポーツとしての登山が始まった。(奈)

<ほん> 『The Alps』藤田弘基、ぎょうせい、1986年。『カラーヨーロッパアルプス』風見武秀、山と溪谷社、1970年。



新着図書(選) - 工学

都市の表情 一らしさの表現像— 服部銈二郎著 古今書院/工系基礎数学演習 桜井誠 大塚勝編 共立出版/漂砂と海岸侵食 榎木亨著 森北出版/知りたい工業数学 工業数学編集委員会編 ジャパンマシニスト/基礎工業数学 野木達夫著 朝倉書店/ポケコンによる材料力学演習 神谷紀生 西谷正著 森北出版/材料力学 西田正孝著 森北出版/マイコン構造力学演習 荒牧軍治 黒木健実著 理工図書/エンジニアのための入門有限要素法 R.K. リブスレー著 サイエンス社/マイコンによる有限要素法入門 水本久夫 原平八郎著 森北出版/エンジニアリングサイエンスのための有限要素法 一理論編— 水本久夫 原平八郎著 森北出版/早わかりポケコンによる構造計算 須賀好富著 鹿島出版会/実習グラフィックス

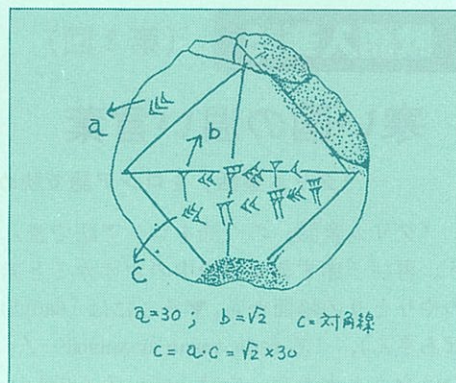
佐藤義雄著 アスキー出版局/土木工学マニュアル 最上武雄監修 近代図書/土木計測便覧 京都大学土木会編 丸善/資格取得マニュアル 一土木施工管理技士・建築施工管理技士・管工事施工管理技士・造園施工管理技士— 地域開発研究所編 改訂版/土質工学用語辞典 土質工学会/イラスト現場のための土木雑学 小川豊著 山海堂/イラスト現場主任のコツ 小川豊著 山海堂/橋梁の耐風・耐震 上原七司著 森北出版/コンクリート道路橋設計便覧 日本道路協会編/トラス橋の理論と設計 島田静雄 熊沢周明著 山海堂/パソコンによる水理学演習 河村三郎著 森北出版/わかりやすい水理学と計算例 桜井盛男著 現代理工学出版/埋立て軟弱地盤の防災 柴田徹編著 森北出版/環境アセスメントの復権 日本科学者会議編 北大図書刊行会/都市と人工地盤 花輪恒著 鹿島出版会/名句で綴る近代建築 谷川正己 中山章著

ロマンの三角形 (第3回)

貴き図形への祈り

ノイゲヴァー教授が『粘土板の数学文書』を著わした1935年はすでにナチスが胎頭し、軍靴の足音高かった。やがて第二次大戦前夜、彼は相対論のインシュタインがそうだったように、ヨーロッパを逃れアメリカに渡った。彼はそこで、新しい粘土板に出会ったのである。▼数学の粘土板はパリのルーブルやロンドンの大英博物館にだけあったのではない。アメリカのイエール大学やコロンビア大学のプリンプトン図書館にも収蔵されていたのである。そこで彼が見い出したものは輝くばかりの「知恵の実」としての「ピュタゴラスの定理」の粘土板だった。▼イエール大学バビロニアコレクションの一枚の粘土板は「正方形一辺を30としたときの対角線の値」が示されていた。彼らは $\sqrt{2}$ の値を30に掛けて正確にその値を出している。それはあのピュタゴラスの発見になると信じて来た「ピュタゴラスの定理」をピュタゴラスよりも1200年前、紀元前1500年も前にバビロニアの人々は知っていたのである。▼さらに、ノイゲヴァー教授はコロンビア大学のプリンプトン・コレクションの中に、今日「プリンプトン322」として知られる一枚の粘土板に注目した。それはピュタゴラスの数がすべて整数になる「ピュタゴラス・トリプル」を示す表が彫られていた。それは今日の古代の数学者がさまざまに解釈しているよ

古代バビロニア
の数学



うに、「 $\alpha^2 - \beta^2 = 1$ 」を作図するためのものようであった。そこから「トリプル」は、 $a=2pq$, $b=p^2+q^2$, $c=p^2-q^2$ になることも知られていたようだ。▼「ピュタゴラスの定理」はバビロニアにあっては生き生きとした生命力を持っていた。「一本の棒がXだけ下るとき右方向にずれる長さはいくらか」これは、棒の長さをLとして $L^2 - (L-X)^2$ の平方を解いて算出したし、「長方形 $xy=a$, その長さ $x+y=b$ 」の方程式を $(\sqrt{xy})^2 = (\frac{x+y}{2})^2 - (\frac{x-y}{2})^2$ として求めている。▼ノイゲヴァー教授は大戦が終わるのを待って新しい英文の『楔形文字の数学文書』を1945年に出版した。戦争の間この「貴き図形」に深い祈りをこめながら。戦争は文明を破壊したが、彼は古代文明の輝かしい宝を見い出していた。(世)

〈ほん〉 『文明における数学—粘土板、算木、パピルスは語る—』黒田孝郎、三省堂、1986年。
『数学の誕生—古代数学史入門—』近藤洋逸、現代数学社、1977年。

井上書院／建築試論 M=A. ロージェ著 中央公論美術出版／アントニオ・ガウディ 鳥居徳敏著 鹿島出版会／建築技術者のためのコンピュータ利用 宮沢健二著 井上書院／建築からの仕掛け 一リ・インカネーション展1980—1985— 東孝光編 学芸出版／日本人のすまい 稲葉和也 中山繁信著 彰国社／日本建築のかたち 西和夫 穂積和夫著 彰国社／実践・建築構造設計とコンピュータ 林楨士郎著 工業調査会／鋼構造設計演習 鋼材倶楽部編 第3版 技報堂／BASICによる鉄筋コンクリート造一連処理 尾形素臣著 森北出版／日本壁のはなし 山田幸一著 鹿島出版会／鉄骨構造の耐震設計 加藤勉編著 丸善／建物の耐震診断入門 大森信次著 改訂版 鹿島出版会／現代建築家ノート グラフィック社編集部編 グラフィック社／建築模型入門 吉田襄著 井上書院／ツーバイフォー・ハンドブック 神戸ツーバイフ

ォー研究会著 鹿島出版会／初めて学ぶ図解ツーバイフォー工法 梓組壁工法教材研究会編 井上書院／図でわかる大工道具 永雄五十太著 理工学社／すまいの火と水 光藤俊夫 中山繁信著 彰国社／世界のすまい6000年 N. ショウナー著 彰国社／和風住宅の知識 小林盛太著 彰国社／ビル住宅設備機材事典ビル住宅設備機材事典編集委員会編 第2版 産業調査会／建築設備配管事典 建築設備配管事典編集委員会編 産業調査会／パイプラインハンドブック 猿渡良一著 改訂版 山海堂／理工系のためのワープロ・ソフト活用法 田口寛著 啓学出版／量のはなし 佐藤理著 鹿島出版会／農業土木ハンドブック 農業土木学会編 改訂4版 丸善／折り紙建築 茶谷正洋著 彰国社／折り紙建築型紙集 茶谷正洋著 彰国社／折り紙建築春夏秋冬 茶谷正洋著 彰国社／折り紙建築虎の巻 茶谷正洋著 彰国社

寒い国の温い言葉

—『グリム童話』をロシア語で読めば—

『グリム童話』の一節をロシア語で読んでみよう。再び「赤ずきん」の中のオオカミと赤ずきんのやりとりの場面から。▼そこには「бабушка」(おばあさん), 「У тебя такие большой…!」(あなたはなんと大きな…を持っているんでしょう!), 「Чтоб」(～のため), 「Это」(これは)がくりかえされている。▼ロシア語は性別を独仏語のように頭の帽子のような冠詞によって区別するのではなく「語尾の母音」によって区別する。男性は「子音」, 女性は「А又はЯ」, 中性は「О又はЕ」によって。бабушкаはАで終わるので女性名詞。▼しかし, これはあくまで主格の話で, 生格(の), 与格(に), 対格(を), 造格(によって), 前置格(において)では母音は多様に変る。しかし「格の性転換」が行われるので一見複雑な表になるがずっと整理される。▼その母音には二種類あって一つは硬母音に当る「а, ы, у, о」もう一つは軟母音の「я, й, ю, е」である。▼文中「У тебя…」ともう一つオオカミが用いている「тебя」は形は同じだが前者は生格, 後者は対格になる。▼ロシア語文法のもう一つの特色は「У тебя…」にみられるように英語の〈have〉に当る語がないということだ。これは〈be〉動詞についてもいえる。それでは一体どうして完了形を表わすのか。

グランドスラム	グ ラ マ ー
第 3 回	ロ シ ア 語

〈 Красная шапочка 〉

— Ой, бабушка, отчего у тебя такие большие уши?
 — Чтоб лучше тебя слышать!
 — Ой, бабушка, а какие у тебя большие глаза!
 — Это чтоб лучше тебя видеть!
 — Ой, бабушка, а что это у тебя такие большие руки?
 — Чтоб легче тебя схватить!
 — Ох, бабушка, какой у тебя, однако, страшно большой рот!
 — Это чтоб легче было тебя проглотить!

それは現在動詞の語頭に前綴を付加する。「読む」はчитатьだが「読んでしまった」の完了形はпроを加えて прочитать となる。もちろん前綴は多様で, 辞書には現在不定詞とセットで記述されている。▼もちろん, ロシア語の動詞には人称変化がある。このように語尾が次々に変わるヨーロッパの言語は屈折語とよばれる。形容詞も例外ではなく, 名詞に対応した独自の変化がある。文中「大きな」を表わす большие と большой のちがいに注目されたい。前者は複数形, 後者は男性, 女性は большая だ。▼ロシアの気候は寒い。言葉は石づくりに類しているがその響きは温い。それは語尾変化の「母音」のためだろう。(乙)

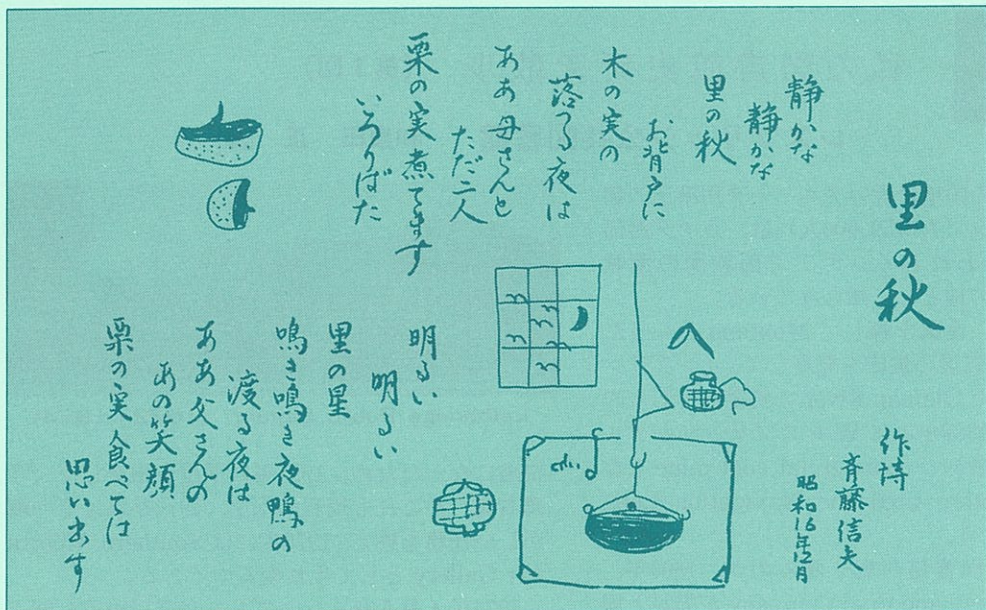
〈ほん〉 『ロシア語のすすめ』東郷正延, 講談社, 1966。

新着雑誌

事務管理 5(7)(45)昭40—14(12)(161)昭50, 25(1)(292):昭61+/
 ビジネスガイド 23(6—9)(299—302)(307—314):昭61/5—10月+/
 DIAMOND ハーバード・ビジネス 11(6)(62):昭61/11+/
 土木構造物材料論文集 (土木学会西部支部, 九州橋梁構造士学研究会) 福岡 1:昭61+/
 江別市文化財調査報告書 (江別市教育委員会) 江別 19—23:昭60—昭61+/
 学術情報センターニュース 1:昭61/6+/
 合格情報処理 2(6—11):昭61/6—11月+/
 漁港実験年報 (北海道土木部海岸漁港建設課) 13:昭59年度+/
 [北海道大学保健管理センター]英文論文集 札幌 創刊号:1986+/
 インフォメーション 5(1—10), (35—44):昭61/1—10+/
 [上智大学]哲学科紀要 11—12:1985—

1986+/
 情報処理試験 月刊 2(3, 8, 10—11):昭61/3, 8—10—11+/
 北のいぶき 北海道開発庁広報課 1—2:昭61/3—6+/
 [神戸大学]神戸法学年報 1:1985+/
 [松山商科大学]松山商科大図書館報 11:昭61/4+/
 民事訴訟法雑誌(民事訴訟法学会) 1—28:1954—1982+/
 日経アーキテクチュア 269:1986+/
 日経コミュニケーション 18:昭61/9+/
 日経コンピュータ 131:昭61/9月+/
 日経パソコン 18—30, 41—47:昭59/9—昭61/1986+/
 日本の美術 236—243:昭61/1—8+/
 労働問題研究 (中央労働学園) 1—49:昭21/10月, 昭26/4月

毎日新聞 縮刷版 4(37)—18(209):昭28/1—昭42/5月, 37(433—438):昭61/1—6+/
 読売新聞 縮刷版 329:昭61/1+



海沼 実 (かいぬま みのる) —ヒューマニズムあふれた最後の童謡作曲家

日本の童謡・唱歌の中に秋を歌う名曲は多い。「赤とんぼ」「紅葉」「雁」「野菊」「虫の声」などは誰れもが愛唱している。「里の秋」も又その一つにあげられる。▼作曲した海沼実とは戦前、戦後と「音羽ゆりかご会」を主宰し、童謡を作曲して、「最後の童謡作曲家」と呼ばれる。彼の曲にはどこかヒューマニズムがただよっている。▼彼の曲を歌ったのが川田姉妹。その中には「あの子はだあれ」「カラスの赤ちゃん」「お猿のかごや」「蛙の笛」「みてござる」「夢のお馬車」「みかんの花咲く

丘」があった。▼歌集の選者には、なぜか海沼作品をあまり良い歌でないとして省く人がいるがそれは片手落ちだろう。▼作詩者は昭和16年にすでに詩を書いた千葉県教師。南国の戦地へおもむく人を気づかした詩に戦争の影をみる。▼海沼実とは中山晋平、高野辰之と同じ長野生れ、昭和46年62歳で没した。(彦)

〈ほん〉 『歌をたずねて—愛唱歌のふるさと』毎日新聞社学芸部、1983年。『日本童謡集』河田紀、小島美子、音楽の友社、1980年。

避暑地の100年

—トルストイの世界そのままに—

“上流社会の縮図”ともいえる軽井沢は今年100年。英国人宣教師が初めて別荘地を建てたのは1886年(明治19年)のことだった。今、一万戸の別荘が建ちならぶ華やかな世界だ。夏ともなれば東京の人口に近い800万人が訪れるという。「NHK特集」が映した“ひと夏の軽井沢”はあたかもロシアの文豪トルストイが活写した「貴族社会」そのもの。徳川家あり細川家あり、政・財界の人々あり。彼らが持つ別荘は庶民には高嶺の花だが、経済大国日本!別荘地が大衆のものとなる日もそう遠い日のことではないだろう。

ジャーナルトピックス

極楽よりも地獄を求め

—『青い山脈』の石坂洋次郎氏逝く—

戦後の精神生活に明るい雰囲気を与えた石坂洋次郎氏が10月7日、86歳で逝去。青森県生れ、三田育ち。『青い山脈』『山のかなたに』『若い人』などにみられる作風は幸福そのものだが、彼自身は「退屈そうな極楽よりも血の池、針の山の責め苦がある地獄」に住みたいと願った。(「天声人語」朝日新聞10月9日)この言葉に北国の人のもつ心の“求道性”を読みとれまいか。

アメリカとの国境に近いアルバータ州第三の都市レスブリッジ(人口59,900人)は、カナダ西部では最後といわれるインディアン部族間の激戦(1870—71)の地として知られている。

1874年には、金鉱を探して Montana からきた M.シュランが石炭の鉱床を発見して、インディアンの戦場であった Oldman River の斜壁谷で石炭の採掘を始め、1882年には W.レスブリッジがアルバータ州では最初の commercial coal mine となる North-Western Coal and Navigation Company を設立する。

そして公共図書館前史を飾るのが、1890年、Alberta Railway and Coal Company が発足と同時に鉄道工事に従事する社員のために、会社内に設けた小さな読書室である。この読書室は人口約2,000人の文化施設をもたない炭鉱だけの寒村としては、文化活動の拠点として貴重な役割をはたしていくのである。

1909年には、熱心な市民が自分たちの専用の図書館を建設する運動を始めたが、これに必要な財源を調達することができないため、市民の有志が3,000冊の図書を持ち寄り、1919年8月14日、YMCAの一室を借りて図書館を誕生させたのである。

まもなく、この「YMCA 間借り図書館」を生んだ Lethbridge Public Library Board は、“blood money”として市民には評判の悪い Carnegie Foundation から25,000ドルの資金を導入し、1922年1月24日、Galt Garden Park に総工費34,000ドルをかけた念願の独立した図書館を完成したのである(写真の左側)。しかし開館20周年をまたずして、利用者が出入りするにも困難なほど



Lethbridge Public Library (1922—1974)

狭隘になったため、1951年に平屋を増築した(写真右側)がこれも焼石に水で、1974年にはその輝かしい任務を終え、1976年には Southern Alberta Art Gallery として生れ変わるのである。

1974年4月5日、レスブリッジ市民が待ち望んでいた新しい図書館が5番街南の角に開館した。来賓として出席した A.アンダーソン市長は、約100人の市民を前につぎのように述べた。

“There is a great desire for knowledge required by citizens to judge the complex demands of society today. The library will serve useful in that respect and will serve citizen's literature needs.”

私は、レスブリッジ大学に滞在中の去る8月12日にこの図書館を訪ね、Information Service 課長の L.マクエラヴィ氏と懇談した。その日は summer vacation にもかかわらず、地下ホールでは story teller を囲む子供たち、広い閲覧室では幼児の手をひいた母親、そして老夫婦、オーディオ・コーナーに集まる若者、消費者コーナーで熱心に資料を調べる青年など多くの利用者で活気にあふれていた光景は、今も目に焼きついて離れない。

(本学事務部長・図書館事務長)

開館時間

本館

9:30~20:00 (月~金)

9:30~18:00 (土)

工学部分室

9:30~17:00 (月~金)

9:30~13:00 (土)

日曜祝日、創立記念日は休館いたします。

北海学園大学附属図書館報

図書館だより

Vol.8 No.3

(通巻 99号)

本館 〒062 札幌市豊平区旭町4丁目1番40号
(011)-841-1161 内線 272~275

工学部分室 〒064 札幌市中央区南26条西11丁目
(011)-561-2911 内線 64